Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-08-03

司馬江漢から北山寒巌へ－江戸時代後期洋風画の研究

橋本，寛子

(Degree)
博士（学術）
(Date of Degree)
2010-03-25
(Resource Type)
doctoral thesis
(Report Number)
甲4815
(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1004815

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。

氏　　名	橋本　寛子
博士の専攻分野の名称	博士（学術）
学　位　記　番　号	博い第 4815 号
学位授与の　要　件	学位規則第 5 条第 1 項該当
学位授与の　日　付	平成 22 年 3 月 25 日

【 学位論文題目 】

司馬江漢から北山寒巌へ－江戸時代後期洋風画の研究

審　査　委　員

主　査　　教　授　百橋　明穂
客員教授　中部　義隆
准教授　宮下　規久朗
准教授　田中　康二
客員准教授　内藤　栄

本論は、江戸時代後期に活動した二人の洋風画家について焦点を当てるものである。それらは表題にあるように、一人目は司馬江漢（一七四七－一八一八）であり、もう一人は北山寒巌（馬孟熙）（一七六七－一八〇一）である。両者はどちらも江戸で同時代に活動したことが知られているが、同時に論じられることはなかった。一見、両者の作品から共通点を見ることは困難であるが、彼らの洋風画家としての制作活動の背景を探ることにより、両者が蘭学と関わることによって、江戸時代後期洋風画家として果たした役割について考えるものである。

本論は三部構成であり、第一部では江漢の腐食銅版画と油彩による洋風日本風景図、第二部では江漢の銅版《天球図》を中心に置きながら、寒巌とその父馬道良の洋風画作品との関係付けを行い、そして第三部では、寒巌の洋風人物像《ヘイステル像》を中心に、寒巌の洋風画制作の解明を試みるものである。そして、本論全体としては、第一部では風景図、第二部では自然科学関連作品、第三部は西洋人物像と、江戸時代後期の洋風画を大きく様式ごとに概観しつつ、第一部の江漢から第三部の寒巌へと中心が移行する構成とした。

風景画を主に取り扱った第一部では、江漢の西洋画法による日本風景図、主に寛政八年（一七九六）作《相州鎌倉七里浜図》を中心に取り上げたものである。従来、成瀬不二雄氏をはじめ、江漢の油彩による日本風景図は、その先駆性が主に注目されてきたが、本論ではその制作背景について考察した。

《相州鎌倉七里浜図》に見られる特徴的な透視遠近法を用い、湾曲した海岸線の構図は、日本創製の腐食銅版眼鏡絵《三囲景図》の隅田川の川縁から派生し、さらにその図像源泉はヨンストンの『禽獣魚介蟲図譜』の「鯨図」にある湾曲した海岸線から借用されたことを明らかにした。さらに、実際の景色に立っているかの様な、この観者と同一目線の表現は、眼鏡絵の特徴と共通することを指摘した。江漢の《相州鎌倉七里浜図》制作以前の下地に眼鏡絵制作の経験があり、江漢は眼鏡絵自体を「西洋」として捉えていたことからこそ、それを同じ西洋の媒体である油彩で風景を拡大化させることを思いついたと考えられる。つまり《相州鎌倉七里浜図》は眼鏡絵が小型の腐食銅版画から、油彩の大型作品へ移行した瞬間であったと考えられる。

そして、第二部では、江漢の自然科学全般の作品と著書について述べ、その中で江漢の寛政八年（一七九六）作《天球図》に中心を考察してきた。江漢による《天球図》は、中国の天文図の上に、西洋の星座絵を重ね、南北の円周の縁に沿うように一二宮像と反転した二八宿が合わさっているが、この図像については、先行研究で指摘されてこなかった。その手掛かりは、ブラウの天地球儀を修理するために寛政三年（一七九一）から六年（一七九四）の間に司天台に勤務した馬道良とその息子北山寒巌に、江漢が寛政五年（一七九三）一月に『地球全図略説』とともに刊行した《地球全図》の地名を指導してもらったことであった。馬道良は天球儀補修後、その記録を修理翌年寛政七年（一七九五）に『阿蘭陀天地両球修補製造記』としてまとめ、同年六月に《天球十二宮象配賦二十八宿図説》を制作した。そこには江漢の《天球図》同様に、西洋の十二宮像に中国の二十八宿を重ねた図像が、一直線に洋風表現で描かれたものであった。この馬道良の作品によって江漢は《天球図》の着想源を得たと考えられる。そして、同時に馬道良を補佐した息子の寒巌は、天地球儀補修とほぼ同時期ぐらいに幕府所蔵《フィッセル改訂ブラウ世界図》の実物大模写をした。江漢が馬道良を訪ねたことから、両者はお互いの存在を知っていたと考えられる。

以上から、江漢は、馬親子から《天球図》の図像の着想源を得ていた可能性がある。その背景には、先述の寛政年間（一七八九－一八〇〇）からの蘭学者たちとの離反があったことで、江漢は本多利明や馬氏親子といった蘭学社中以外の知識人に接近していったことが推測されるのである。

そして、第三部においては、寒巌の寛政年間（一七八九－一八〇〇）制作と推定される《ヘイステル像》を中心に、蘭方医たちと美術の関係について考え、江漢と寒巌の立場を考察した。寒巌の《ヘイステル像》はローレンツ・ハイステル著『外科学』の扉絵にあるハイステルの肖像の模写である。これは、日本における最も早い段階の西洋人肖像画であり、文化年間（一八〇四－一八一七）から急激に増加するヒポクラテス像に先行する蘭方医たちの守護聖人であったと考えられる。また、寒巌は《ヘイステル像》を制作する以前に、パステル画でも同図様を制作し、そこには寛政元年（一七八八）の年記があることから、《ヘイステル像》もそれに近い制作年代であると考えた。『外科学』の日本語翻訳を任された大槻玄沢は、『外科学』を通して、日本で最初にヒポクラテスが外科学の祖であることに気付いた蘭方医であり、寛政一一年（一七九九）に自ら石川大浪にヒポクラテス像を依頼している。つまり寒巌の《ヘイステル像》は、ヒポクラテス像が制作される寛政一一年以前に制作された可能性が高い。

そして、寛政六年元旦（一七九四）閏一一月一一日に大槻玄沢邸で行われた第一回オランダ正月を描いた《芝蘭堂新元会図》にて、この画面中央に位置する壁面に飾られた西洋人肖像画に注目した。それは、第一回オランダ正月がヒポクラテス像が初めて制作される寛政一一年（一七九九）以前であることと、また寛政八年（一七九六）のオランダ正月の「蘭学者芝居見立番付」にはハイステルの名前を借用した配役が玄沢に充てられており、寛政八年（一七九六）の段階でも蘭学者たちはヒポクラテスを認識していないことから、これはヘイステル像である可能性が高いことを明らかにした。さらに、ヘスリンク氏の述べるように寒巌がそこに参加しているのであれば、《芝蘭堂新元会図》の西洋人肖像画は玄沢によって依頼された寒巌による《ヘイステル像》の可能性が高いことを指摘した。

以上、江漢と寒巌の制作活動を比較すると、その二人の関係が最も顕著に表れているのが、寒巌の《ヘイステル像》の制作であろう。寒巌の《ヘイステル像》は最も早い西

洋人肖像画であることから、寒巌はこのジャンルで先鞭をつけたといえよう。江漢は風景図同様に、佐竹曙山との合作《西洋男女図》（天明五年（一七八五）六月一日以前）以降、西洋人物画も尽力したテーマの一つであった。しかし、それらの作品の中には実在した西洋人を描いたものはなく、また江漢は医学系に関する洋風画はほとんど手掛けていない。また、江漢は医学系著書の挿絵家として、選ばれなかった。

その背景は、第三部で考察してきた《芝蘭堂新元会図》に見出せる。この第一回オランダ正月が開かれた寛政六年（一七九四）閏一一月一一日は、桂川甫周著『漂民御覧記』に江漢が見当違いの批判をしたことから、「烏有道人」と名乗る蘭学社中の人物によって江漢が非難された直後の出来事であった。ヘスリンク氏はここに玄沢がわざわざ問題となった大黒屋光太夫を、江漢と反対側の上座に座らせることによって、江漢自らの立場を知らしめる事を行ったと指摘しているが[1]、そこに追い打ちをかけるように、翌年寛政七年（一七九五）には松平定信著『退閑雑記』において、江漢は銅版画制作方法の秘密主義を非難された。こうした蘭学者との離反と、江漢以外の優れた技術を持った洋風画家たちの台頭によって、江漢が油彩の西洋画法による日本風景図という新たな様式と画題を模索したことにつながると考えられる。

本論では取り上げた江漢の《天球図》と《相州鎌倉七里浜図》は、ともに寛政八年（一七九六）作であり、同年一一月に石川大浪が弟の孟高とともに五百羅漢寺に奉納されたファン・ロイエン筆《花鳥図》の精緻な模写を行っている。これは江戸時代を通じて一般公開された唯一の西洋油彩画であったため、大きな反応を引き起こしたといわれる[2]。江漢の《相州鎌倉七里浜図》を始めとする絵馬奉納活動の一端には、この五百羅漢寺に奉納されたファン・ロイエンの《花鳥図》を意識していたとも考えられる。江漢もファン・ロイエンのように不特定多数の人々の目に触れ、称賛される機会を狙っていたのであろう。

その結果として、江漢の奉納活動は功を奏したといえるが、塚原氏が指摘するように、江漢の追随作が氾濫し、近代に至るまで江漢作品が泥絵やペンキ絵の中に埋没した感があった[3]のも確かである。しかし、成瀬不二雄氏が指摘するように、明治時代以前の日本に、宗教や文学から解放された写実的な風景表現を大いに普及させたことに関しては、江漢の洋風風景図が果たした役割は大きいといえる[4]。

以上から、幕府の与力である寒巌の洋風画は、主に蘭学者といった知識人たちに受容さる一方、在野の町絵師である江漢は出版活動と社寺に絵馬の奉納活動を通して、不特定多数の人々に受容されることを目的とした。その背景にはそれぞれ、江漢は蘭学者たちとの離反、寒巌は父馬道良ともに天地球儀修理の実績があった。それは、寒巌は夭折であったことから作品数は少ないが、それぞれの作品数の現存数がそのことを物語っていると考えられる。江戸後期洋風画において、江漢は洋風日本風景図で、寒巌は西洋人肖像画でそれぞれの先駆をなしたといえるだろう。

---

1 R.H.Hesselink, A Dutch New Year at the Shirando Academy 1 January, *Monumenta Nipponica*, Vol.50, No.2, Sophia University, 1995.pp.217-220.

2 タイモン・スクリーチ『江戸の思考空間』青土社、一九九八年、六九頁。

3 塚原晃「社寺奉納洋風風景画における司馬江漢の制作意図」『美術史』一三五、一九九四年、九七－九八頁。

4 成瀬不二雄「司馬江漢の日本風景図について」『論集日本の洋学』三、清文堂出版、一九九五年一二月、五三頁。

［ 課程博士用 ］

（ 別紙１ ）

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

氏　　名	橋本　寛子
論 文 題 目	司馬江漢から北川寒巌へ－江戸時代後期洋風画の研究

要　　旨

本論文は、江戸時代後期に活動した二人の洋風画家、司馬江漢と北川寒巌（馬孟熙）について焦点を当てるものである。両者はどちらも江戸で同時代に活動したことが知られているが、同時に論じられることはなかった。作品から共通点を見ることは困難であるが、彼らの洋風画家としての制作活動の背景を探ることにより、両者が蘭学と関わることによって江戸の洋風画界に果たした役割について考察したものである。

第一部では主に風景画を扱い、江漢の西洋画法による日本風景図、主に寛政八年作《相州鎌倉七里浜図》を中心に取り上げている。従来、江漢の油彩による日本風景図はその先駆性が主に注目されてきたが、本論ではさらにその制作背景について考察している。《相州鎌倉七里浜図》に見られるような、特徴的な透視遠近法による湾曲した海岸線の構図は、「日本創製」の腐食銅版眼鏡絵《三囲景図》の隅田川の川縁から派生し、さらにその図像源泉はヨンストンの『禽獣魚介蟲図譜』の「鯨図」にある湾曲した海岸線から借用されたことを明らかにした。さらに、観者と同一の視点をもつ表現は、眼鏡絵の特徴と共通することに注目し、江漢の《相州鎌倉七里浜図》制作の下地には眼鏡絵制作の経験があり、江漢は眼鏡絵自体を「西洋」として捉えていたことからこそ、それを同じ西洋の媒体である油彩で風景を拡大化させることを思いついたとし、《相州鎌倉七里浜図》は、眼鏡絵が小型の腐食銅版画から油彩の大型作品へ移行した瞬間であったと結論づける。

第二部では、江漢の自然科学全般の作品と著書について述べ、その中で江漢の寛政八年作《天球図》に中心を考察している。江漢による《天球図》は、中国の天文図の上に、西洋の星座絵を重ね、南北の円周の縁に沿うように十二宮像と反転した二十八宿が合わさっているが、この図像については先行研究で指摘されてこなかった。その手掛かりは、ブラウの天地球儀を修理するために寛政三年から六年の間に司天台に勤務した馬道良とその息子北山寒巌に、江漢が寛政五年一月に『地球全図略説』とともに刊行した《地球全図》の地名を指導してもらったことであった。馬道良は天球儀補修後、その記録を修理翌年寛政七年に『阿蘭陀天地両球修補製造記』としてまとめ、同年六月に《天球十二宮象配賦二十八宿図説》を制作した。そこには江漢の《天球図》同様に、西洋の十二宮像に中国の二十八宿を重ねた図像が、一直線に洋風表現で描かれたものであった。この馬道良の作品によって江漢は《天球図》の着想源を得たと考えられる。そして、同時に馬道良を補佐した息子の寒巌は、天地球儀補修とほぼ同時期ぐらいに幕府所蔵《フィッセル改訂ブラウ世界図》の実物大模写をした。江漢が馬道良を訪ねたことから、両者はお互いの存在を知っていたと考えられ、江漢は馬氏親子から《天球図》の図像の着想源を得ていた可能性を指摘する。寛政年間以降、江漢は蘭学者たちと離反していたため、本多利明や馬氏親子といった蘭学社中以外の知識人に接近していったことを推測している。

第三部においては、寒巌の寛政年間制作と推定される神戸市立博物館蔵《ヘイステル像》を中心に、蘭方医たちと美術の関係について考え、江漢と寒巌の立場を考察した。寒巌の《ヘイステル像》はローレンツ・ハイステル著『外科学』の扉絵にあるハイステルの肖像の模写であるが、日本における最も早い段階の西洋人肖像画であり、文化年間から急激に増加するヒポクラテス像に先行する蘭方医たちの守護聖人であった。また、寒巌は《ヘイステル像》を制作する以前に、パステル画でも同図様を制作し、そこには寛政元年の年記があることから、《ヘイステル像》もそれに近い制作年代であるとする。『外科学』の日本語翻訳を任された大槻玄沢は、『外科学』を通して、日本で最初にヒポクラテスが外科学の祖であることに気付いた蘭方医であり、寛政十一年に石川大浪にヒポクラテス像を依頼している。つまり寒巌の《ヘイステル像》は、ヒポクラテス像が制作される寛政十一年以前に制作された可能性が高いとする。そして、寛政六年元旦閏十一月十一日に大槻玄沢邸で行われた第一回オランダ正月を描いた《芝蘭堂新元会図》の画面中央に位置する壁面に飾られた西洋人肖像画に注目する。第一回オランダ正月が、ヒポクラテス像が初めて制作される寛政十一年以前であること、また寛政八年のオランダ正月の「蘭学者芝居見立番付」にはハイステルの名前を借用した配役が玄沢に充てられており、寛政八年の段階でも蘭学者たちはヒポクラテスを認識していないことから、これはヘイステル像であると推測する。さらに、ヘスリンクの述べるように寒巌がそこに参加しているのであれば、《芝蘭堂新元会図》の西洋人肖像画は、玄沢によって寒巌に依頼され、大槻家に伝来した神戸市立博物館蔵《ヘイステル像》であったにちがいないと指摘した。この説は、《芝蘭堂新元会図》の西洋人肖像画の像主をめぐる長い論争に終止符を打った点で評価できるといえよう。

寒巌の《ヘイステル像》は最も早い西洋人肖像画であることから、寒巌はこのジャンルで先鞭をつけたといえる。江漢は風景図同様に、佐竹曙山との合作《西洋男女図》以降、西洋人物画も尽力したテーマのひとつであった。しかし、それらの作品の中には実在した西洋人を描いたものはなく、また江漢は医学系に関する洋風画はほとんど制作せず、医学系著書の挿絵も手掛けていない。その背景は、《芝蘭堂新元会図》のうちに見出されるという。この第一回オランダ正月が開かれた寛政六年閏十一月十一日は、桂川甫周著『漂民御覧記』に江漢が批判をしたことから、江漢が非難された直後の出来事であった。ヘスリンクはここに、玄沢がわざわざ問題となった大黒屋光太夫を、江漢と反対側の上座に座らせることによって、江漢自らの立場を知らしめる事を行ったと指摘しているが、それに加え、翌年寛政七年には松平定信によって、江漢による銅版画制作方法の秘密主義が非難された。こうした蘭学者との離反と、優れた技術を持った洋風画家たちの台頭が、江漢が西洋画法による日本風景図という新たな様式と画題への模索を促したと指摘している。

幕府の与力であった寒巌の洋風画は、主に蘭学者といった知識人たちに受容される一方、在野の町絵師である江漢は、出版活動と社寺への絵馬の奉納活動を通して、不特不特定多数の人々に受容されることを目的としていた。その背景にはそれぞれ、江漢は蘭学者たちとの離反、寒巌は父馬道良ともに天地球儀修理の実績があった。そして、江戸後期洋風画において、江漢は洋風日本風景図で、寒巌は西洋人肖像画でそれぞれの先駆をなしたと結論づけている。

従来の美術史ではほとんど注目されなかった北川寒巌という画家に注目し、その事績を発見し、美術史に位置付けることで、司馬江漢と江戸洋風画の研究に大きく寄与した論文である。その一端は美術史学会全国大会や明治美術学会などで発表されて高く評価され、美術史学会誌『美術史』にも掲載されている。以上のことから、本論文に対し、博士（学術）を授与するに値するとの結論で一致した。

主査記載氏名・印	百橋　明穂

審査委員

区　分	職　名	氏　　名	区　分	職　名	氏　　名
主　査	教授	百橋　明穂	副　査	客員准教授	内藤　栄
副　査	准教授	宮下　規久朗	副　査	准教授	田中　康二
副　査	客員教授	中部　義隆			